

## 夕餉の支度前

これまでに何を暮らしてきたか  
そんなことを想いながら  
たっぷりクリームの混じった春の陽の差し込む居間で  
ガラス窓越しに見える雲を独り眺めている

いちにち、いちにち、というものは  
鮮やかになったり  
色褪せ、薄れたり  
常に移ろい変化していくもの

私には幸福というものなど必要ではない  
ましてや、いつもいつもはしゃいでいたら  
いつもいつもはしゃいでいなければならなくなる  
ただ、時おり喜べるような出来事があったらいい

戸棚の中にあるコップやお皿は眠っている  
夕方になったらまた起き出してもらうけれど  
今は眠っていてもかまわないわね  
ああ、あの人は今ごろどうしているかしら

今日はまだ何も起きてはいない  
昨日も特段のことは起きなかった  
明日は雨が降るらしい  
いろいろなところにまるい滴が生まれるのでしょうか

あの人はいつも、おどおどと気にしているのよ  
私がつまらない毎日を送っているのじゃないかって  
ばかね、あなたは・・・  
私には幸福というものなど必要ないのに

時おり、さーっ、と影が通り過ぎるように  
寒々とした寂しさがすっぽりと肩を包むときもある

そんなときには、<sup>ひと</sup>人間であることを棄てて  
天道虫のようにベランダに出て雲を眺めています

これまでに 何を暮らしてきたか

何も、とりたててこれといったものはなかった  
たぶん遠からず、子供も授かるのだろう  
その営みにかけるあの人の情熱には微笑さえしてしまう

何者かに、あるいは誰かに必要とされていることの確信  
それはそんなに重要なことではない気がする  
私自身が生きている拠り所が何であるかの確認  
それもそんなに重要なことではない気がする

今日、何を歩いたか  
そして明日、歩く場所があるか  
そのことだけが愛しい  
そのことだけを想っている

食器棚のガラスに映る私が誰なのか  
それさえ蒸発してゆくような  
そんな一日を歩いてゆくこと  
そのことだけを想っている

ああ、あの人は今ごろ何をしているのかしら  
幸福であることを確かにするために  
きっと顔に汗して己を励ましているに違いない  
それがあの人の喜びであり続ければそれでいい

これまでに何を暮らしてきたか  
そんなことを想いながら  
たっぷりクリームの混じった春の陽の差し込む居間から  
私は、ぼかぼかとして立ち上がる

(2009.3.30)